

修証義

第一章 総序

生を明らめ 死を明らむるは仏家

一大事の因縁なり、生死の中に仏あ

れば生死なし、但生死即ち涅槃と

心得て、生死として厭うべきもなく、

涅槃として欣うべきもなし、是時初め

て生死を離るる分あり唯一大事

因縁と究尽すべし。

人身得ること難し、仏法値うこと希れ

なり、今我等宿善の助くるに依りて、

已に受け難き人身を受けたるのみに

非ず、遇い難き仏法に値い奉れり、

しょうじ なか ぜんしょう さいしょう しょう
生死の中の善生、最勝の生なるべし、

さいしょう ぜんしん いたず ろめい むじよう
最勝の善身を徒らにして露命を無常

かぜ まか なか
の風に任すること勿れ。

むじようたの がた し ろめい
無常憑み難し、知らず露命いかなる

みち くさ お みすて わたくし あら
道の草にか落ちん、身已に私に非ず、

いのち こういん うつ しぼら とど がた
命は光陰に移されて暫くも停め難し、

こうがん さ たず
紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとする

しょうせき つらつらん ところ おうじ ふたた
に蹤跡なし、熟観ずる所に往事の再

お おお おお いた
び逢うべからざる多し、無常忽ちに到

こくおう だいじん しん じつじゆう ぼく さいし
るときは国王大臣親暱従僕妻子

ちんほう な ただひと こうせん おもむ
珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣

おの したが ゆ ただこ
くのみなり、己れに随い行くは只是れ

ぜんあくごうとう
善悪業等のみなり。

いまよ いんが し ごつぼう あき
今の世に因果を知らず、業報を明ら

さんぜ し ぜんあく わき
めず、三世を知らず、善悪を弁まえ

じゃけん ともがら ぐん
ざる邪見の党侶には群すべからず、

おおよそいんが どうりれきねん わたくし
大凡因果の道理歴然として私なし、

ぞうあく もの お しゅぜん もの のぼ
造悪の者は墮ち修善の者は陞る、

ごうり たが も いんがぼう
毫釐も忒わざるなり、若し因果亡じて

むな ごと しょぶつ しゅっせ
虚しからんが如きは、諸仏の出世ある

そし せいらい
べからず、祖師の西来あるべからず。

ぜんあく ほう さんじ ひとつ
善悪の報に三時あり、一

にはじゆんげんほうじゆ ふたつにはじゆんじしやうじゆ みつには
者順現報受、二者順次生受、三者

じゆんごじじゆ さんじ ぶつそ
順後次受、これを三時という、仏祖の

どう しゅじゆう そのさいしよ この
道を修習するには、其最初より斯

さんじ ごつぼう り なら あき
三時の業報の理を効い験らむるなり、

爾しかあらざれば多く錯りて邪見おおに墮あやまつる

なり。但ただ邪見じゃけんに墮おつるのみに非あらず、

悪道あくどうに墮おちて長時ちようじの苦くを受うく。

当まさに知るべし今生こんじようの我身わがみ二つ無なし、三み

つ無なし、徒いたずらに邪見じゃけんに墮おちて虚むなしく

悪業あくごうを感得かんとくせん、惜おしからざらめや、悪あく

を造つくりながら悪あくに非あらずと思おもい、悪あくの報ほう

あるべからずと邪思じゃしゆい惟よするに依よりて、

悪あくの報ほうを感得かんとくせざるには非あらず。

年 月 日

氏名

謹写